

今月のみことば 2018年2月

「はじめに神が天と地を創造された。」

(創世記1章1節)

聖書の冒頭にこの1節があるかないかで、聖書の理解が根底からガラリと変わる。

新島襄も、若き日、函館において漢訳聖書抜粋(『真理易知』)により、この聖句を知った。それが新島の生涯を変える原点となった。

この世界には「はじめ」があったのだ。

いつの間にか、宇宙が存在していたのではない。この世界にははじめがあった、と科学界が認めるようになったのは、1948年のことであると知って驚く(「ビッグバン理論」(ジョージ・ガモフ))。しかし、聖書は、書かれた数千年前より、「はじめ」があったことを告げている。

「神」とはイスラム教のアラーではない。ヒンズー教の神々でもない。日本の八百万の神々でもない。原語では「エロヒーム」、英語では大文字で始まる God である。

この神が「天と地を創造された」。

つまり、私たちが見る自然界のすべてを、また宇宙を創造されたのである。

そうすると、なぜ、宇宙がこれほど見事に出来ているのか、という説明は容易である。

「ゲノム」解析が終わったら、生命の秘密が解き明かせる、と科学者たちは期待していたが、解析が終わった今も、それ以前と変わらず、生命の神秘はヴェールに包まれたままである。ダーウィンの時代、生命の仕組みはごく簡単なもの、と思われていたが、今は、計り知れない英知がそこに隠されていることに多くの科学者が畏怖を覚えている。

「創造する」というヘブル語の(バーラー)は、無から有を生じさせる、という意味がある。

であるとすれば、私たちの命を含むすべてのものの正当な所有者(オーナー)は神であることになる。

この世の生が終われば、神の前に一人一人が引き出されて、「与えられた」命をどのように使ったのか、説明責任がある、という聖書の教え(死後の裁き)も理にかなっている。

しかし、ある意味で、これほど人間のプライドを傷つける話はないであろう。一方、もし神が私たちを含めて、すべてを創造された、ということが事実であるならば、私たちの生き方が根底から変わらざるを得ないのも事実である。

自分の生涯を振り返るときに、私たちは数知れない失敗を犯していることに気がつく。「罪」とは神に造られた人間として、神の創造の目的に叶わなくなっている状態を言う。「なすべからざることをなし、なすべきことをしない」ことが罪であるとする、これに該当しない人が果たしているだろうか。

しかし、道徳の法廷において、責められることが一点もない方が現れた。それがイエス・キリストである。同時代の誰一人、敵ですらキリストの罪をひとつだに指摘することができなかった。その罪なきキリストが私たちの罪の支払いをしてくださった、と聖書は教える。

新島は単に有神論者になったのではない。キリストを信じてクリスチャンとなった。神は天地を創造されただけでなく、やがて新天新地をも創造される(「黙示録」)。ただし、そこに入れるのは、キリストによって罪赦された者だけである。だれもがこの招きに応えたいものである。



ジョージ・ガモフ



留学生時代の新島襄